

EBV 陽性悪性リンパ腫における末梢血 EBV DNA 量の検討

◎重藤 翔平¹⁾、根岸 達哉¹⁾、古川 聖美¹⁾、松田 和之²⁾、菅野 光俊¹⁾
信州大学医学部附属病院¹⁾、信州大学医学部保健学科²⁾

[はじめに]

末梢血中 EBV DNA 定量は、EBV 関連疾患の診断やモニタリングのために重要な検査である。EBV DNA 定量検査は、主に Real-time PCR 法を用いて行われているが、各施設で独自の標準物質を用いて測定していること、また検体種（末梢血全血、血漿、末梢血単核球など）が様々であることなどから、明確な診断基準となる定量値がない。また、EBV は終生感染するウイルスであるため、低値陽性の臨床的判断が難しい。よって基準範囲や臨床判断値は、各施設で独自に設定する必要がある。今回我々は施設基準範囲設定のため、悪性リンパ腫における末梢血全血 EBV DNA 量の検討を行った。

[対象および方法]

2013 年から 2017 年において、当院で病理診断を行い、EBER-ISH が陽性で悪性リンパ腫と診断され、治療開始前に血中 EBV 定量が検査された 13 症例（年齢：20 から 77 歳）および、EBER-ISH が陰性であった 5 例を対象とした。EBV DNA の定量は、末梢血全血より DNA を抽出し、

QuantStudio12K(Applied Biosystems)を用いて、Real-time PCR 法により行った。

[結果]

EBER-ISH 陰性悪性リンパ腫症例の血中 EBV DNA 量が、<10 から 150 コピー/ μ g DNA であったのに対し、EBER-ISH 陽性例は、130 から 724150（中央値 3710） コピー/ μ g DNA であった。明らかな骨髄浸潤のない症例に限った場合、130 から 11210（中央値 270） コピー/ μ g DNA であった。

[結論]

今回の検討から、100～200 コピー/ μ g DNA の低値であっても EBV 陽性の悪性リンパ腫を否定できないと考えられる。既に岩下ら（医学検査 2015;64(1):48-53）が報告した当院の健常人や他の EBV 関連疾患の EBV DNA 量と合わせて、適切な基準範囲および臨床判断値が設定できると考えられた。

[連絡先]

信州大学医学部附属病院遺伝子染色体検査室（0263-37-2802）